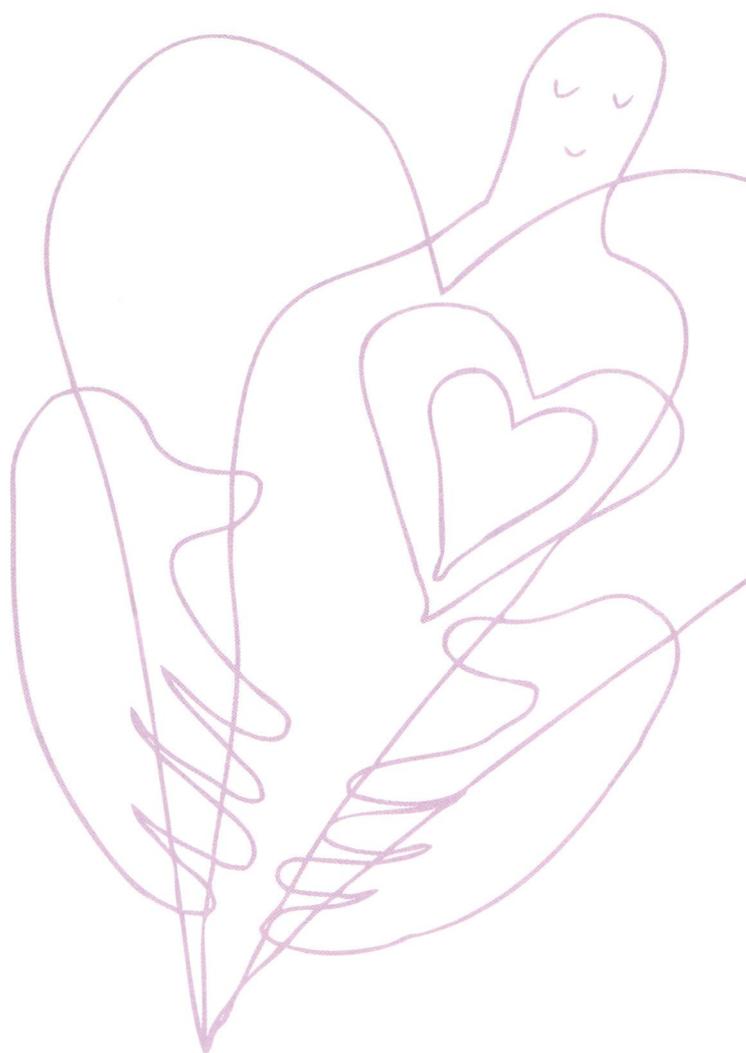




文部科学省私立大学
戦略的研究基盤形成
支援事業採択



暑い日が続きますが、いかがお過ごしでしょうか。

昨年度スタートした、

「加害—被害関係の多角的研究」

「育てる関係の危機と子育ての意識の多相性についての研究」

「芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究」

「心理療法の現在に関する検証—臨床と研究の即応的關係の構築—」

の4つのプロジェクトが今年度から本格的に始動しました。

今秋は、「戦争体験の記憶と語り」というテーマでシンポジウム行います。

みなさまのご参加をお待ちしています。





活動報告

第二次世界大戦中、戦時情勢の悪化に伴い、都市部の学童が集団で疎開をしました。本プロジェクトは、「聞き取り、歴史資料、フィールドワークを相互に関連づけ、戦争体験の立体的な記録化を目指す」ことを方針にすすめてきました。具体的には、精道国民学校（兵庫県芦屋市）の生徒が備中高梁（岡山県）へ集団疎開した際の疎開体験を記録化することを目的とした活動です。

昨年プロジェクト開始時点で戦争体験者自身による記録化と調査がすでに進んでおり、これをベースに調査を進め、両者を総合化して戦争体験の全体像を構築することを目指すこととしました。具体的には、①戦争体験者からの聞き取り、②戦争体験者による記録化・調査の検討、③集団疎開に関する史料調査、④疎開先での現地調査（フィールドワーク）、という4つの柱にそった活動です。

①については、2008年8月、10月の2度にわたり、甲南大学において聞き取りを行いました。体験が記録されたことそのものが貴重な成果であるとともに、聞き取りの中で、疎開先で必要な調査事項が絞り込み、④へつながる活動が出来ました。

②については、戦争体験者が収集した疎開先での写真や手紙などの提供を受け、内容の分析を行いました。また、体験者が2006年に疎開先を訪問した際の様子が瀬戸内放送のニュースで紹介されています。その映像をもとに、④の活動につながる重要な情報を事前に得ることができました。

③については、疎開先の高梁で作成された当時の行政文書の調査（「学童疎開綴」）を行いました。「学童疎開綴」（高梁中央図書館所蔵）は、事務手続きや具体的な準備、運用など、疎開に関わるあらゆる事柄についての公文書が1冊に綴られた冊子です。①での活動と併せて検討することにより、戦争体験者という「子どもの目線」に加え、疎開を受け入れる行政側という「大人の目線」からの検討が可能となり、疎開の全体像を構築するにあたり、非常に重要な成果となると考えています。

④については、現地で戦争体験者から聞き取りを行うことにより、大学での聞き取りで不明確だった点を確認したり、現地に立ってみて新たに思い出した話を聞き取ることが出来るなど、新たな情報を得ることが出来ました（2009年3月3～5日実施）。

上記の活動を踏まえ、2009年3月8日に公開班会議を行いました。会議には当プロジェクトの研究員に加え、他のプロジェクトの研究員や、戦争体験者が参加しました。まず、研究員が活動報告を行い、参加者とこれまでの研究成果を確認・共有する作業を行いました。つづいてフロアの皆さんと意見交換を行い、次年度以降の課題について参加者から貴重なご意見をいただきました。2008年度の成果をベースとしつつ、2009年度の活動を行いたいと思っています。

ご関心のある方は是非、今後の研究にご協力ください。

プロジェクト1 加害—被害関係の多角的研究 戦争体験の記録化と歴史学



現地調査の様子

日時：2009年3月8日(日) 午後1時30分～

場所：甲南大学18号館 3 階講演室

報告：東谷 智
(甲南大学/日本史)

福島 幸宏
(京都府立総合資料館/日本史)

司会：人見佐知子
(甲南大学人間科学研究所博士研究員/日本史)

企画：森 茂起
(甲南大学/臨床心理学)

※当研究所では、上記のプロジェクトと並行して、アンケート調査およびインタビュー調査を通じて、戦争体験を量的・質的に探求するプロジェクトを行っています。さらに、ドイツで同様のテーマで研究を進めている研究チームと連携し、国際比較を行うことも計画しています。当研究所では、この調査に協力していただける方を探しています。対象は昭和7年～20年生まれの方です。調査にご協力いただける方がいらっしゃいましたら、電話、FAX、Eメールのいずれかで当研究所までお知らせください。

Tel/Fax：078-435-2683

Eメール：kihs@center.konan-u.ac.jp

プロジェクト3 芸術学と芸術療法の
共有基盤確立に向けた学際的研究

パーソン・センタード表現 アートセラピーの根幹



左：通訳の富田香里先生 右：シェリー・デイヴィス先生

日時：2009年3月31日(金) 午後4時30分～
場所：甲南大学18号館 3階講演室
講師：シェリー・デイヴィス
(表現アートセラピー研究所顧問/表現アートセラピスト)
通訳：富田 香里
(通訳、翻訳家、表現アートセラピートレーニング修了生)
協力：表現アートセラピー研究所

1970年代、アメリカ各地で様々な表現媒体を用いた表現アートセラピーが生まれました。ナタリー・ロジャーズは、パーソン・センタード・アプローチに基づいて芸術表現を心理療法に取り入れました。彼女はそれを「パーソン・センタード表現アートセラピー」と呼び、独自の活動を開始します。今回の研究会では、ナタリーがもっとも信頼を置いている同僚で、現在カリフォルニア総合大学で教鞭を執っておられるシェリー・デイヴィス氏に講師を務めて頂きました。

ここで、アメリカの心理学の歴史を簡単に振り返ってみましょう。1950年代までのアメリカでは、フロイトの流れを汲む精神分析や(1930年代以降)人間の行動を客観的、あるいは機械的にパターン化して判断する行動主義心理学が主流でした。ところが1960年代になると、1950年代までの精神分析と行動主義心理学とは異なる人間性心理学が登場します。人間性心理学とは、これまでの心理学のあり方を批判的に受け止めたうえで、人間の健康的、肯定的側面を重視しようとするものです。そして、この「第三の勢力」とも呼ばれる人間性心理学の中心人物のひとりがカール・ロジャーズです。彼は、「人間は自然に自分を癒すことができ、個人の成長に必要な創造性に向かって進んでいく有機体である」というパーソン・センタード・アプローチの考え方を明確にしました。

カール・ロジャーズの娘、ナタリー・ロジャーズはパーソン・センタード・アプローチの哲学を踏襲し、そこに芸術表現を導入することでパーソン・センタード・表現アートセラピーという独自の分野を確立しました。これは、クライアントのクリエイティブな力を引き出すことで心理療法と同様の治癒が期待できる芸術療法です。その特徴は主に3つあります。ひとつは、何かを創造したいという人間の力(クリエイティブな力)を信じること。2つ目の特徴は、カウンセラーがクライアントの世界観をそのままに感じ取り、受け入れ、分析や判断をしないこと。そして3つ目は、絵画などひとつの芸術表現だけでなく、ペインティング、コラージュ、彫刻、コスチューミング、サウンド、ドラマなどあらゆるアートを用いることができることです。

ここで注目すべきは、ひとつのアート制作が他のアート制作のインスピレーションとなり、それらが循環していく、クリエイティブ・コネクションというあり方でしょう。表現アートセラピーの現場は、クライアントがアート創作によって自分の内なる変化を発見/体験する自己探求の場でもあり、また創作物を他者と共有するアートによるコミュニケーションの場でもあります。

講演会では、デイヴィス氏によって上記のような論が展開されました。富田氏の流暢な通訳が理解を大いに助け、聴衆は、生きて在ることのすべてに関わる内容を味わい深く噛みしめたのではないのでしょうか。この試みはアートや心理療法を専門的に職業とする人にとっても、そうでない人にとっても、まさに「自己探求」を体験する時間となったように思われます。

参考：氏原寛、山中康裕ほか編『心理臨床大辞典』、2004年、培風館

● これまでの活動

公開研究会

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究
第45回 パーソン・センタード表現アートセラピーの根幹
 開催日: 2009年3月13日(金) 16:30~
 講師: シェリー・デイヴィス
 (表現アートセラピー研究所顧問/表現アートセラピスト)
 通訳: 富田 香里
 (通訳、翻訳家、表現アートセラピートレーニング修了生)
 協力: 表現アートセラピー研究所

プロジェクト2. 育てる関係の危機と子育て意識の多相性についての研究
第46回 父親の子育て 父親にしかできない子育て
 開催日: 2009年6月20日(土) 13:00~16:00
 講師: 小崎 恭弘
 (神戸常盤大学短期大学部幼児教育学科/児童福祉学)
 発表者: 新道 賢一、濱田 智崇、川口 彰範
 企画・司会: 高石 恭子 (甲南大学/臨床心理学・学生相談)

研修会

第6回 心理臨床ワークショップ
解離性障害の心理臨床
 開催日: 2009年3月15日(日) 10:00~17:00
 講師: 細澤 仁 (兵庫教育大学/精神医学、臨床心理学)
 共催: 甲南大学心理臨床カウンセリングルーム
 後援: 兵庫県臨床心理士会

● これからの活動

公開シンポジウム

プロジェクト1. 被害被害関係の多角的研究
第9回 「戦争体験の記憶と語り」
 開催日: 2009年9月6日(日) 13:00~17:30
 場所: 甲南大学5号館1階511教室
 シンポジスト: 森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)
 東谷 智 (甲南大学/日本史)
 中田 政子 (神戸空襲を記録する会)
 指定討論: 中尾 知代
 (岡山大学/ポストコロナルスタディ、オーラルヒストリー)
 野上 元 (筑波大学/歴史社会学)
 松本 泉 (毎日新聞大阪本社)
 司会: 森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)
 企画: 森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)
 ※参加には事前申込が必要です。
 申込方法は、ホームページ (<http://kihs-konan-univ.org>)
 を御覧になるか、
 電話でお問い合わせください (078-435-2683)。

研修会

第3回 思春期発達支援研修会
第47回 プロジェクト2公開研究会
発達障がい児を育てる保護者への支援
 開催日: 2009年11月12日(木) 16:30~19:00
 講師: 高山 恵子 (NPO法人えじそんくらぶ代表)
 企画・司会: 南野 美穂

発行年月日: 2009年7月31日



編集後記

4月から新しい博士研究員3名とリサーチアシスタント2名が研究所に入りました。まだまだひよっこですので、みなさまの暖かいご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願いします。9月のシンポジウムの詳細が決まりました。研究者をはじめ、市民団体や新聞記者といった多彩な面々を迎え、これまでのシンポジウムとは異なる活発な議論が期待できそうです。みなさまの積極的なご参加をお待ちしています。